

第1章 ～源流～ 花巻城御用大工の流れを組む高常組製作所

明治、大正期～昭和13年



高橋吉助の祖父の肖像画



(高橋吉助の父) 高橋常吉の写真



松庵寺にある高橋勘次郎の碑

花巻城の御用大工

創業者高橋吉助の祖父は江戸末期に花巻の大沢で生まれ、鬼柳で大工奉公を合計13年行った後花巻で独立、最後は花巻城の御用大工の棟梁となり、当時100人扶持を頂戴したといわれています。100人扶持というのは、城の普請のために必要な左官屋、屋根屋、石屋などの専門職人を100人程度常に動員できる状況においておくことであり、明治5年（1872年）の廃藩まで務めていました。明治5年に花巻城が廃城となった際、お城の解体を行い、その資材を花巻の業者に払い下げを行ったそうです。明治5年には三番目の次男として常吉が生まれています。

高常組製作所

花巻地方には、江戸末期から明治期にかけて、東北随一の宮大工としてあがめられていた名工2代目高橋勘次郎がおり、花巻市松庵寺境内に建立されている高橋勘次郎翁寿碑には東北各地の棟梁の名前が刻まれています。高橋常吉はこの愛弟子であり、師匠勘次郎ゆずりの腕の立つ大工でありました。しかし彼は派手な宮大工の道を選ばず、北上盆地を支える農民の力となって生きる水車大工を選びました。彫刻も巧みで、常吉自作の墨壺など芸術性の高い作品が遺されています。当時、動力といえば牛馬と水力利用が主であり、農民は水車を切り離しての生活は考えられず、水車は灌漑用にもたくさん使用されていました。水車を造るには高度な幾何学的技術が必要でしたので、優秀な水車大工は限られており、高常（たかつね）さんと言われていた高常組製作所の名声は花巻、北上、水沢はもとより、気仙沼そして盛岡まで知られていたと言われていました。高橋常吉は昭和13年3月3日、66歳で亡くなり、事業は長男幸助が受け継ぎました。

宮沢賢治が大正12年(1924年)3月30日に記した「塩水撰・浸種」という詩の中で「高常水車の西側から くるみのならんだ崖のした 地蔵堂の巨きな松まで」と高常水車は当時の花巻の風景の一部として詠われています。

宮沢賢治作

「塩水撰・浸種」

一九二四、三、三〇、

塩水選が済んでもういちど水を張る

陸羽一三二号

これを最後に水を切れば

穎果の尖が赤褐色で

うるうるとして水にぬれ

一つづつが苔か何かの花のやう

かすかにりんごのほひもする

笹に顔を寄せて見れば

もう水も切れ俵にうつす

日ざしのなかの一三二号

青ぞらに電線は伸び、

赤楊はあちこちガラスの大きな籠を盛る、

山の尖りも氷の稜も

あんまり淡くけむってゐて

まるで光と香ばかりでできてるやう

ヒドロ
湿田の方には

朝の氷の骸晶が

まだ融けないのでこってゐても

高常水車の西側から

くるみのならんだ崖のした

地蔵堂の巨きな松まで

カタタ
乾田の雪はたいてい消えて

青いすずめのとっぼうも

空気といっしょにちらちら萌える

みちはやはらかな湯気をあげ

白い割木の束をつんで

次から次と町へ行く馬のあしなみはひかり

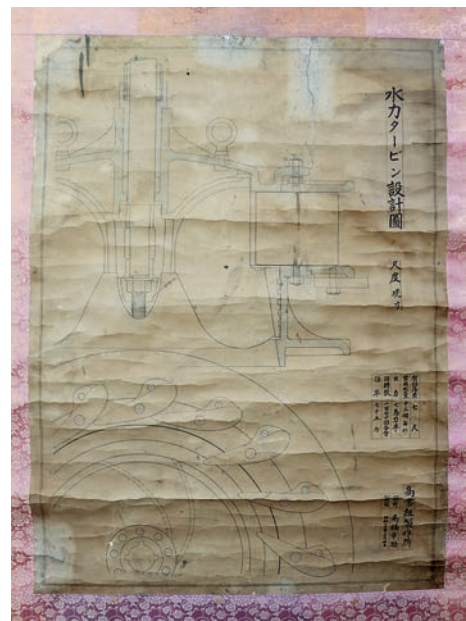
その一つの馬の列について来た黄いろな二ひきの犬は



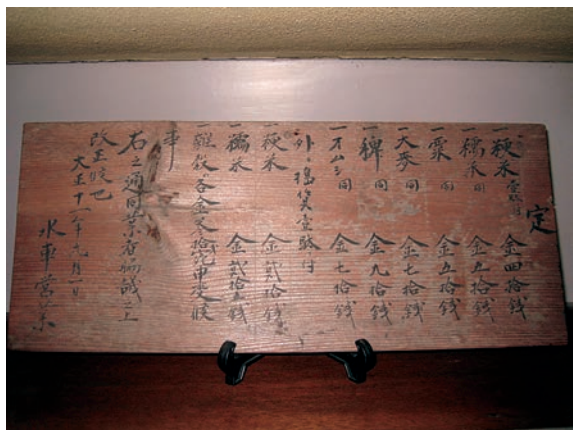
高常組製作所外観



「宮沢賢治と石神」の概念図(石神町記録より)



高常組製作所の水カタービン設計図(昭和13年)



大正11年水車営業価格表 粉米金四拾銭 他

尾をふさふさした大きなスナップ兄弟で
 ここの犬と
 はげしく走って好意を交はす
 今日を彼岸の了りの日

雪消の水に種粉をひたし
 玉麩を買って羹をつくる
 ここの古い風習である

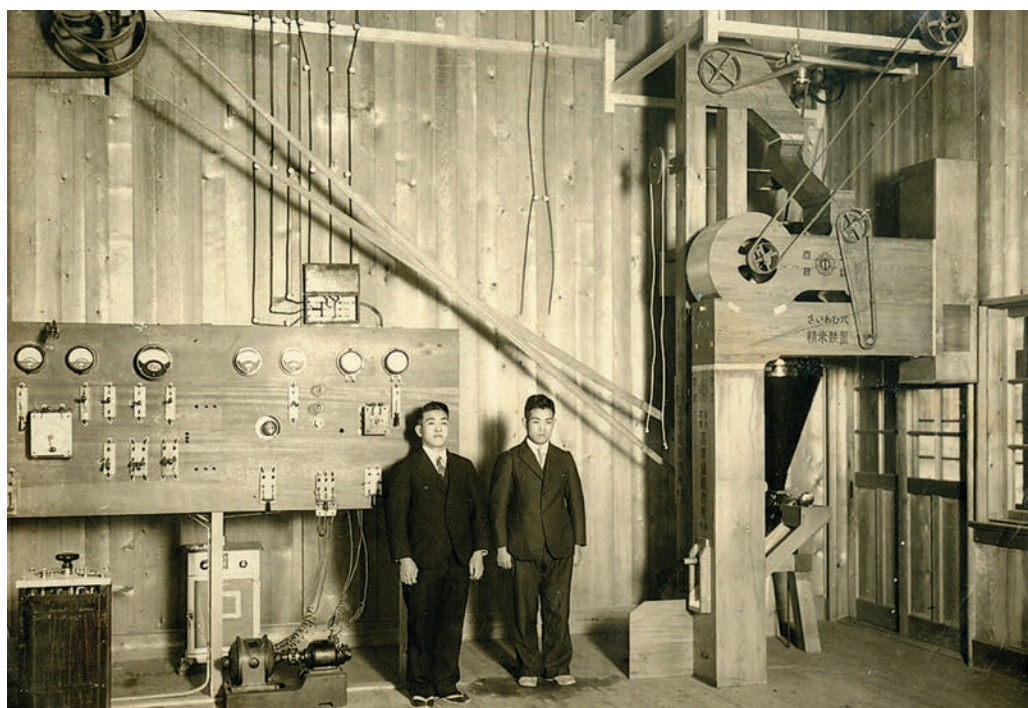
(『宮沢賢治全集』より)



高橋吉助が函館で営んでいた幸製粉所 (昭和8年~13年)

函館での起業

高橋吉助は、昭和8年~昭和13年まで一時高常組製作所を離れ、兄の三男直助が教鞭を執っていた函館に渡り、そこで事業を興しました。幸製粉所を営んだほか、大工と機械の知識をもとに木型屋を始め、一定の成功を収めたようです。さらに仕事を拡張しようとしたが、自身が函館ではよそもので、地域の信用をなかなか得られずに資金調達もできず、かなり苦労したと述べています。昭和13年3月3日に父親の常吉が亡くなった後、即花巻に帰郷しました。



高常組製作所製さいわい式精米装置